

竹取物語

エピソード2

～蓬萊の玉の枝～

これやわが求むる山ならむと思ひて、

さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりを

さしめぐらして、二、三日ばかり、見歩くに、

天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、

銀の金鉢を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、

船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「こ

れは、蓬萊の山なり。」と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その

山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金・銀・瑠璃色

の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたり

に、照り輝く木ども立てり。

その中に、この取りてまうで来たりしは、いと

わろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来

たるなり。

◎歴史的仮名遣い

「竹取の翁といふ者」のような、古文特有の仮名遣いを、“歴史的仮名遣い”という。これに対して、現代使われている仮名遣いを、“現代仮名遣い”という。“歴史的仮名遣い”を、“現代仮名遣い”に直すには、いくつかのルールがある。

- ## 1. 助詞「む」は、「 」と読む

(例) 歴 これやわが求むる山ならむ

↓

現 ()

2. 「ア段+ウ(フ)」は、「 」と読む

(例1) 歴 登るべきやうなし

↓

現 ()

(例2) 歴 まうで来たり

↓

現 ()

◎係助詞「や」「か」

「や」「か」は、「」を表す係助詞。

文中に「なむ」「や」「か」などの係助詞があると、文の結び(最後)が、終止形以外の形になることがある。
これを「」という。

(例1) 通常版

古 これわが求むる山ならむと思ひて、

訳 ()

なむ版

古 これやわが求むる山ならむと思ひて、

訳 ()

(例2) 通常版

古 この山の名を何と申す。

訳 ()

か版

古 この山の名を何とか申す。

訳 ()

